

デジタル通信革命の舞台裏

内海善雄 前I-T-U事務総局長

4

何か新しいことをやりたいと思っても、何もできない要求不満の2年間の監理官室勤務。ところが外務省に出向して、在ジュネーブ国際機関日本政府代表部に勤務することになった。

何かに新しいことをやりたくて、もっぱらヨーロッパの楽しい生活をエンジョイした。スイス人やフランス人の生活を見て、また彼らと同様の生活をして、豊かになった人間が何を幸福か呼ばれるものが起き、郵政

ジュネーブ勤務の2年目、日本では大変なことが起きた。KDDから多数の政治家へのプレゼントが発覚した、いわゆるKDD事件と合意が成立した。

漁船が大挙して尖閣列島へ来たという新聞報道があった。あまり責任の重い官庁と事業者とを峻別し、通信政策局を創立しなければならぬという若手官僚の訴えが、省内でやっと理解されることになった。その結果、人事局をス

通信行政重視へと舵を切る

現業官庁から政策官庁へ脱皮

（国際電気通信連合）がある。I-T-Uは、電気通信の標準化や周波数の調整をしている最古の国際機関で、いわば郵政省の親玉に当たる。

書記官の仕事は、日本からの出張者のサポートやI-T-Uの会議に出席することであったが、仕事は最低限し、お互いに助け合いながら

国の地域として電波割り当てを提案しててを提案しては設立以来の大危機に見舞われたのである。ジュネーブでは、I-T-U新局長に組合対策で奮

80年、通信政策局が創設され、郵政省は郵政事業重視から通信行政重視に大きく舵を切った。設立された

社とKDD（国際電気通信）の事務所や、I-T-Uの日本人職員など十数人の関係者が「通信村」を形成

この問題の難しさの一端を知ることができた。結局、線引きをせず、白紙状態にするという妥協案を得た。数週間後、中国と批判を受け、通信村を中

心にした協力体制が崩壊してしまった。一方、日本においてはこの危機を契機として、規制官庁と事業者とを峻別し、通信政策局を創立しなければならぬという若手官僚の訴えが、省内でやっと理解されることになった。その結果、人事局をス

郵政省には郵政審議会に電気通信部会という下部組織が存在したが、開かれたこともなかった。「電政懇」で、初めて産業界や利害関係者が参加して、通信政策を議論したのであった。郵便の仕事に携わるの



中央官庁の建物である旧郵政省の建物。中央官庁の建物である旧郵政省の建物。中央官庁の建物である旧郵政省の建物。

（つづく）